

『源氏物語』女からの贈歌考

——明石の君と光源氏の贈答をめぐって——

風 岡 む つ み

はじめに

明石の君は、藤井貞和氏が「源氏物語中の屈指の歌よみのひとり」^①と評し、鈴木日出男氏が「『源氏物語』の作中和歌を勅撰集風に排列し直してみると、明石の君は最も多様な部立の歌を詠みこなせる一人である」と指摘されるように、「源氏物語」において、歌の上手として描かれている。また、明石の君は、作中で二二首の歌を詠んでいる。これは、紫の上の二三首に次ぐ多さであり、その歌々と明石の君物語における関わりについては様々に論じられてきている。^③

例えば、小町谷照彦氏は、須磨巻と明石巻における光源氏と明石の君との贈答を分析され、「明石の君物語は単旋律で展開せずに、常に紫の上の存在を底流に置いて、両者の緊張関係によって進展し

ている」^④と考察された上で、次のように述べられている。

明石の君物語はまだ「潞標」「松風」「薄雲」と展開して行き、各々の場面における和歌もまた多様な役割を果たすのであるが、これまでの考察だけでも、都の紫上の存在を常に底流に置く明石君物語の二重構造に対して、明石入道が介在する明石君との結婚までの過程や都の世界と明石の世界との懸隔がしだいに露呈して来る離別の経緯などが、歌語や内容の一致の如何による贈答の様々な形態や分離、並列、反復、贈歌のみなど贈答の様々な形式、独詠による場面描写や物語の構造とのかかわり合いによって、物語の世界に定着している様相を窺い得たように思われる。^⑤

小町谷氏は、明石の君の物語における和歌の役割を、「贈答の様々な形式」や「独詠による場面描写や物語の構造とのかかわり合

い」という視点から論じられている。

また、鈴木日出男氏は、

「身のほど」の現実的発想ではつながりえない源氏との関係
を、歌の言葉によって回復しようとする明石の君の和歌は、い
くら注意してもすぎることがない。和歌固有の発想に自己を
封じこめながら、おのが孤心と他者への連帯とを綱渡りのよう
に構造化している。^⑥

という。小町谷氏や鈴木氏が指摘される明石の君の和歌の性質や物
語の役割について女からの贈歌という視点からはどのように表現さ
れているだろうか。

そこで、本稿では、明石の君と光源氏の間で交わされる、特に明
石の君から光源氏への贈歌をきっかけとする二人の贈答のあり方を
考察する。

この明石の君から光源氏への贈歌という視点から明石の君の歌を
考察している先行研究に、高野晴代氏の次のような指摘がある。

明石の君は詠まれるのを待っているだけと思いきや、むしろ
詠ませるようにしていた可能性がある。——中略——六条院に迎え

入れられてからは、光源氏との贈答歌がなくなるが、「初音」
巻の演出から推してみても、和歌を贈られる女ではなく、贈ら
せた女ともなり得るのではないか。ただし、六条院のヒロイン

が玉鬘となったとき、「野分」巻では贈歌となるような独詠は
すでに詠めなかった^⑦。

この指摘は女からの贈歌という問題を考える上で重要な指摘であ
ろう。なぜなら、歌を贈る際に、その歌がどのような仕掛けによっ
て贈られたのかという点が、この問題を考える上で重要なためであ
る。

このような研究史を踏まえて、女からの贈歌という視点で明石の
君の贈歌を考えると、贈歌が詠まれた場面や、その場面における
光源氏と明石の君の関係がどのようなものであるかということに、
留意する必要がある。

本稿では、以上の視点から明石の君の贈歌における、明石の君の
歌のあり方について考察を進める。

一

明石の君の贈歌から始まる、明石の君と光源氏との贈答は作中
において四回交わされる。その最初の贈答が次にあげる明石巻の贈答
である。

この常にゆかしがりがたまふ物の音などさらに聞かせたてまつ
らざりつるを、いみじう恨みたまふ。(光源氏)「さらば、形見
にも忍ぶばかりの「ことをだに」とのたまひて、京より持てお

はしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかに掻き鳴らしたまへる、深き夜の澄めるはたとへん方なし。——中略——心の限り行く先の契りをのみしたまふ。(光源氏)「琴はまた掻き合はするまでの形見に」とのたまふ。女、

なほざりに頼めおくる一ことをつきせぬ音にやかけてしのばん(明石の君)

言ふともなき口ずさびを恨みたまひて、

「逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらはことに変わらざらなむ(光源氏)

この音違はぬさきにならずあひ見む」と頼めたまふめり。されど、ただ別れむほどのわりなさを思ひむせたるもいとことわりなり。^⑧

(②明石・二六五～七頁)

明石から都へと帰ることになった光源氏は、明石に残すことになった明石の君と最後の逢瀬を交わす。ここで注目したいのが、明石の君の歌「なほざりに」の前に、光源氏の「琴はまた掻き合はするまでの形見に」という言葉があるということである。

このように、女の贈歌の前に、男の消息の文面や言葉が置かれている事例は『後撰和歌集』のような勅撰集、『伊勢物語』『大和物語』といった歌物語や、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』といった日記作品などにも見られるものであり、『源氏物語』内にも一六例の事

例が見られる。^⑨

明石の君の歌「なほざりに」もまた、直前の光源氏の言葉を引き受け、それに対して反発や不安を述べるといった内容になっているが、さらに注目したいことは、この場面における明石の君と光源氏との関係である。この場面は明石から都へと帰っていく光源氏とその状況を受け入れるしかない、明石の君との間に置かれた離別の場面である。いいかえるならば、都から下つて来た男がその地の女性と恋仲になったものの、都に帰る際にその女性を伴って帰ることはしない、という状況だということになる。

このように、都から地方へ下る、もしくは地方から都へと上っていく男に対して女が歌を贈る事例を『古今和歌集』『後撰和歌集』の中から幾つかあげると次のようになる。

紀宗定が東へまかりける時に、人の家に宿りて、あか月出で立つとて、まかり申しければ、女の、よみて、出だせり
ける
よみ人しらず

えぞ知らぬ今心みよ命あらば我やわする、人や訪はぬと

(『古今和歌集』巻八・離別歌・三七七)

あひ知りて侍ける人の近江の方へまかりければ

よみ人しらず

関越えて粟津の森のあはずとも清水に見えし影を忘るな

返し

よみ人しらす

近ければ何かはしるし相坂の関の外ぞと思絶えなん

〔後撰和歌集〕恋四・八〇一、二二

京に侍ける女子を、いかなる事か侍けん、心うしとて、留
め置きて、因幡の国へまかりければ　むすめ

打捨て君しいなばの露の身は消えぬ許ぞ有とたのむな

〔後撰和歌集〕離別・二二二〇

平のたかとをが、いやしき名とりて、人の国へまかりける
に、「忘るな」と言へりければ、たかとをが妻の言へる

よみ人しらす

忘るなど言ふにながる、涙河うき名をす、ぐ瀬ともならなん

〔後撰和歌集〕離別・二二三四

これらの事例を見ると、残される女は、男との離別を憂う歌を詠み、男へと贈っている。つまり、相手の不実を嘆く歌を女性が詠み、男がそれを否定する歌を詠むという、恋愛の贈答における類型を用いていることが推察される。

明石の君の歌「なほざりに」は、直前にある光源氏の言葉「琴はまた掻き合はするまでの形見に」を、「なほざりに頼めおくる」とと受けた上で、それでも自分はその言葉を信じて待つということものである。そしてこの明石の君の詠み方には、男の愛情を疑い、自

らの感情を訴えかけるという恋愛歌の典型ともいえる詠み方をしながら、自己の心情を托すという特徴がある。かつ、『古今和歌集』や『後撰和歌集』に見られるような都へと去っていく男に対して、自らのつたなきを男に訴える女の歌の伝統に立つものとして理解できないだろうか。

また、明石の君の「言ふともなき口すさ」んだ歌「なほざりに」に、光源氏が歌を付け返すのは、女が男に対して自分たちの関係に対する憂いや不安を訴えかけてきたのに対して、男が自分の方があなたのことを思っていると切り返すのが恋愛歌の約束事であり、そのことによって、光源氏自身が明石の君との関係を終わらせるつもりがないということを示すためでもあろう。

いずれにしても、明石の君の歌「なほざりに」は、男の言葉を受けて女が歌を詠むという類型と、恋愛関係にある男女において、男が女のもとを離れていく際に交わされる離別の贈答の類型を踏まえて詠まれていることをいわなくてはならない。

二

ところで、光源氏の言葉をきっかけとした明石の君の贈歌は、薄雲巻の巻末にもある。

山里の人も、いかになど、絶えず思しやれど、ところせさの

みまざる御身にて、渡りたまふこといと難し。——中略——まして見たてまつるにつけても、つらかりける御契りのさすがに浅からぬを思ふに、なかなかにて慰めがたき気色なれば、こしらへかねたまふ。いと木繁き中より、篝火どもの影の、遣水の蜩に見えまがふもをかし。(光源氏)「かかる住まひにしほじまざらましかば、めづらかにおほえまし」とのたまふに、

「いさりせし影わすられぬ篝火は身のうき舟やしたひききにけん(明石の君)

思ひこそまがへられはべれ」と聞こゆれば、

「あさからぬしたの思ひをしらねばやなほ篝火の影はさわげる(光源氏)

誰うきもの」とおし返し恨みたまへる。おほかたもの静かに思さるころなれば、尊きことどもに御心とまりて、例よりは日ごろ経たまふにや、すこし思ひ紛れけむとぞ。

(②薄雲・四六五～六頁)

この場面における明石の君の歌「いさりせし」については、『細流抄』が、

此哥古采称美の哥也。明石にての物思ひも、大井にての心つくしもおなしきに、又鷓ふねのか、りをあまのいさりに思ひよそへて、うき事のはなれぬ心をいへり。第四句ことに感あり。¹⁰⁾

と注釈しており、『源氏物語』の作中における秀歌の一つとしてい。また、鈴木日出男氏は、

一首は、明石の浦の漁火を思い起こさせる。この篝火は、あの浦の浮舟がここまでも私を追ってきたのだらうか、わが身のつらさはどこまでもついてまわっているというのか、の意である。

贈歌ではあるが、反発的な発想を契機に自己を否定的にとらえ、「憂き」ことばかりの不運な人生でしかないとする。女歌に特有の、きわめて内省的な歌になっている。¹¹⁾

と、「反発的な発想を契機」とした「女歌に特有の、きわめて内省的な歌」であると指摘されている。¹²⁾この指摘は、明石の君の歌「いさりせし」を考える上で重要である。

薄雲巻の巻末場面の冒頭は、「山里の人も、いかになど、絶えず思しやれど、ところせさのみまざる御身にて、渡りたまふこといと難し¹³⁾」というように、光源氏がなかなか大井に住む明石の君のもとへ通えず、明石の君もまた、「まして見たてまつるにつけても、つらかりける御契りのさすがに浅からぬを思ふに、なかなかにて慰めがたき気色なれば¹⁴⁾」と、まれにしか光源氏に逢うことができな現状に悩んでいることが描かれている。一方光源氏も、明石の君の不安を慰めるきっかけをつかみかねているということが語られている。『後撰和歌集』において、詞書から男が女のもとへ通うことが絶

えがちであるという状況が読み取れ、女からの贈歌であることがうかがえる事例をあげると次のようになる。

あひ知りて侍ける人のもとより、ひさしくとはずして、
「いかにぞ、まだ生きたりや」と戯れて侍ければ

よみ人しらず

つらくともあらんとぞ思ふよそにても人や消ぬると聞かまほし
さに
(恋一・六二七)

親ある女に忍びて通ひけるを、男も「しばしば人に知られ
じ」と言ひ侍ければ
よみ人しらず

なき名とぞ人には言ひて有ぬべし心の問はばいかゞ答へん
(恋一・七二五)

わざとにはあらず時々物言ひ侍りける女、ほどひさしう
とはず侍ければ
よみ人しらず

高砂の松を緑と見し事は下の紅葉を知らぬなりけり
返し
よみ人しらず

時分かぬ松の緑も限なき思ひには猶色やもゆらん

(恋四・八三四、五)

女のもとに、男「かくしつ、世をやつくさむ高砂の」とい
ふ事を言ひつかはしたりければ、
よみ人しらず

高砂の松と言ひつ、年をへて変らぬ色と聞かばたのまむ

『源氏物語』女からの贈歌考

(恋四・八六四)
これらの事例から、恋愛関係にある男女において、男の訪れが途絶えがち、あるいは途絶えていたりする場合、女から男に対して不満や不安といったものを歌に詠み、相手へと贈るといことがわかる。

もちろん、これらの事例の詞書にある男の言葉は、男が女に送った消息の文面の一部である。だが、主旨は端的に示されている。

つまり、中々逢瀬を交わすことができない男女という関係は共通しており、女が男の言葉に対して、反発や不安を歌に詠むという贈答の形が存在していたことは指摘できよう。これは、女からの贈歌が異例であるというよりも、恋愛関係において、男女が歌を贈り合うときの表現の類型であるというべきだろう。

薄雲巻の卷末場面に戻ってみると、光源氏の「かかる住まひにしほじまざらましかば、めづらかにおほえまし」という言葉をきっかけとした明石の君の歌「いさりせし」は、恋愛歌における、訪れの途絶えがちな男性の愛情を疑う女の歌であると同時に、それに対して歌を返すことよって、光源氏に明石の君の不安を慰めるきっかけを与えるものになっている。

つまり、明石の君の贈歌「いさりせし」とそれに対する光源氏の返歌「あさからぬ」は、恋愛関係にある男女において、男が女のも

とへ通うことが絶えがちである状況のもとで女がその事を責める歌を男に贈るといふ類型を踏まえた上で詠まれているのである。

三

光源氏の言葉ではないものの、人物の言葉をきっかけとして歌が詠まれるという点では次の薄雲巻の贈答も同様である。

この雪すこしとけて渡りたまへり。例は待ちきこゆるに、さならむとおほゆることにより、胸うちつぶれて人やりならずおほゆ。——中略——「何か。かく口惜しき身のほどならずだにもてなしたまはば」と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひあはれなり。

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎたまふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出でたまへり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて「乗りたまへ」と引くもいみじうおほえて、

末遠き二葉の松にひきわかれいつか木高きかげを見るべき
(明石の君)

えも言ひやらすいみじう泣けば、さりや。あな苦しと思して、
「生ひそめし根もふかければ武隈の松に小松の千代をなら
べん

のどかにを」(光源氏)と慰めたまふ。

(②薄雲・四三三〜四頁)

この場面は、明石の姫君を自らの手から光源氏と紫の上のもとへ引き渡すことを決めた明石の君と、そのことを知らずに光源氏のものとへ引き取られていく明石の姫君との離別の場面である。この場面における明石の君の歌「末遠き」について、『新編日本古典文学全集』(以下『新編全集』)は、

「二葉の松」は姫君。「ひき」は、正月子の日に小松を引いて長寿を祈ることから、「松」の縁語。異例の、女の側からの贈歌。母としての心情^⑤。

と注釈している。

この指摘の通り、「子の日」に詠まれる歌は、「君のみや野辺に小松引に行く我もかたみにつまむ若菜を」(後撰和歌集)春上・七・よみ人しらず)や「行末も子日の松の例には君が千とせを引かむとぞ思」(拾遺和歌集)賀・二九一・三条太政大臣)というように、小松の根を引き、若菜を積んで長寿を祈るという行事が行われる日であり、歌もまたそのことを踏まえ賀歌の類型をもって詠まれる。

明石の君の歌「末遠き」は、長寿を祝う「子の日」という折を意識しながら、本来であれば、大きくなっていく姿を見続けることができるはずの幼い子供を手放さなければならぬ母親としての心情

を詠み上げているのである。

ところで、『新編全集』はこの「末遠き」歌を明石の君から光源氏への「異例の、女側からの贈歌」とするが、光源氏が明石の君の歌に歌をもって答えたのは、「さりや。あな苦し」と感じたからであり、結果的に贈答の形をなしたともいえる。

光源氏の歌もまた、「子の日」という折節に添いながら、『後撰和歌集』の「裁し時契やし剣武隈の松はふた、び逢ひ見つるかな」（雑三・一二四一・藤原元善）を踏まえ、その再会を約束し、彼女を慰め、姫君を引き取ったあとも明石の君との関係を絶つ気はないということ、歌を返すことで示しているともいえるだろう。

四

ここまで、明石の君の歌の前に、光源氏もしくは明石の姫君といった人物の言葉が置かれている場面を見てきた。次からみていく場面は、明石の君の贈歌の前に人物の言葉によるきつかけがないものである。

姫君の御方に渡りたまへれば、童、下仕へなど御前の山の小松ひき遊ぶ。若き人々の心地ども、おき所なく見ゆ。北の殿よりわざとがましくし集めたる鬚籠ども、破子など奉れたまへり。えならぬ五葉の枝にうつる鶯も思ふ心あらんかし。

「年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音聞かせよ

音せぬ里の」（明石の君）と聞こえたまへるを、げにあはれと思し知る。事忌もえしたまはぬ気色なり。「この御返りは、みづから聞こえたまへ。初音惜しみたまふべき方にもあらずかし」とて、御硯取りまかなひ、書かせたてまつりたまふ。いとうつくしげにて、明け暮れ見たてまつる人だに、飽かず思ひきこゆる御ありさまを、今までおぼつかなき年月の隔たりけるも、罪得がましく心苦しと思す。

ひきわかれ年は経れども鶯の巢だちし松の根をわすれめや
（明石の姫君）

幼き御心にまかせてくだくだしくぞあめる。

③初音・一四五―六頁

この初音巻における明石の君の歌「年月を」について、小町谷照彦氏は、

明石の君の贈歌は、紫の上の思わくを考慮して、明石の姫君への呼びかけという形を借りた、光源氏に対する語りかけと見るべきではなからうか。――中略――あくまでも、明石の君と明石の姫君との贈答という形をとるところに、この光源氏と明石の君との暗黙の了解の上に立った相互の意思の疎通が果たされるのである。¹⁶⁾

と指摘されている。小町谷氏が指摘されるように、五句目の「初音聞かせよ」は、明石の姫君自身に向けられているというよりも、光源氏自身に向けられているものだろう。

なぜなら、年少の姫君が明石の君の歌に返歌をしたのは、明石の君の歌の「初音聞かせよ」を「げにあはれ」と感じた光源氏の「この御返りは、みづから聞こえたまへ」という言葉によるものだからである。

「子の日」という行事を踏まえて詠まれる歌として「引く」「松」という語を使いながら、その内容は長寿を祈るものではなく、薄雲巻において、小松が引かれるように、自らの手を離れた明石の姫君を思うものになっている。明石の君は、薄雲巻の歌「末遠き」と同様に、「子の日」という折を踏まえながら、自らの心情を詠んでいるのである。

この初音巻の場面の直後には、明石の姫君の歌「ひきわかれ」を受け取った明石の君の様子が語られる場面が続いている。

暮れ方になるほどに、明石の御方に渡りたまふ。——中略——
習どもの乱れうちとけたるも、筋変わり、ゆゑある書きざまなり。
ことごとし草がちなどにもぎえ書かず、めやすく書きすまし
たり。小松の御返りをめづらしと見けるままに、あはれなる古
言ども書きまぜて、

「めづらしや花のねぐらに木づたひて谷のふる巢をとへる
鶯（明石の君）
声待ち出でたる」などもあり。「咲ける岡辺に家しあれば」
など、ひき返し慰めたる筋など書きまぜつつあるを、取りて見
たまひつつほは笑みたまへる、恥づかしげなり。

（③初音・一四九～五〇頁）

この明石の君の歌「めづらしや」については、『新編全集』が、
「花のねぐら」は、紫の上の御殿。「谷のふる巢」は明石の君
の御殿。「鶯」は、明石の姫君。「木づたふ」は、木から木へと
移る、源氏の手から紫の上の手へと抱かれてかわいがられるこ
とをさす。¹⁷⁾

と注釈するように、その内容は、光源氏と紫の上と関係を前提にお
き、明石の姫君からの返歌があったことを喜ぶものである。

しかし、田中幹子氏は、歌の中にある「ふるす」という語に着目
され、

このように「ふるす」という表現が使われている時代の作と
して、『源氏物語』の「谷のふる巢をとへる鶯」の歌を見ると、
漢籍を背景に持っているという個性は際立ったものといえる。
しかしやはり和歌を詠む側としては、この当時「ふるす」とい
えば、まずは多少飽きがきている男女関係を連想することが一

般的だったのである。「めづらしや」の和歌も『源氏物語』を離れてみると、男が通わなくなりうち捨てられた自分を、古巢に喩えている女の歌と解釈できる。¹⁸⁾

と指摘されている。また、高野晴代氏が、

この明石の君の和歌は独詠である。したがって返歌をする必要はない。光源氏は、返歌の代わりに、元日であるこの日、紫の上ではなく、明石の君のところに泊まった。独詠は、光源氏に挑むような贈歌の役割を果たしたのである。¹⁹⁾

と指摘されているように、光源氏を意識した、明石の君の贈歌として読める可能性が示唆されている。

また、歌の直後に引かれる「咲ける岡辺に」という古歌について、吉海直人氏が、『源氏物語』における「岡辺」の用例を検討され、そのすべてが光源氏と明石の君の逢瀬の場面に集中して使用されていることを分析された上で、

ここにおける「岡辺」とは、かつて源氏と明石の君が共有した愛の場・愛の時間（紫の上には永遠に共有できないもの）の象徴であり、その結実として明石姫君が誕生しているからである（この場合は娘の方が間接的な存在となる）。つまり普通名詞ならぬ固有名詞としての「岡辺」は、明石の君と源氏の過去の秘密・二人だけの世界に収束されるのである。²⁰⁾

と指摘されている。

これらの先行研究で指摘されているように、この初音巻の場面において、明石の君の歌「めづらしや」は、「梅のはなさけるをかべにいへしあればともしくもあらず鶯のこゑ」（古今和歌六帖）第六・四三八五）といった古歌を踏まえ、明石の姫君が自らの手元を離れ、光源氏と紫の上に養育されていること、そんな姫君から返歌があったことを喜ぶ気持ちを光源氏へと伝え、同時に自分のもとへあまり訪れがないことを恨んでいることを仄めかしているとすれば、明石の君の歌「めづらしや」は、独詠歌であると同時に、男の訪れが途絶えがちであることを責める女の贈歌ともなると考えられないだろうか。

五

初音巻における明石の君の贈歌は、人に物を贈る際に、そこに歌を添えるという習慣によったものであったが、次にあげる明石巻の贈歌もまた同様の事例に当たる。

入道、今日の御設け、いとかめしう仕うまつれり。人々、下の品まで、旅の装束めづらしきさまなり。いつのまにかしあへけむと見えたり。御よそひは言ふべくもあらず、御衣櫃あまた荷さぶらはす。まことの都の苞にしつべき御贈物ども、ゆゑ

つぎで、思ひよらぬ隈なし。今日奉るべき狩の御装束に、
寄る波にたちかさねたる旅衣しほどけしとや人のいとはむ
(明石の君)

とあるを御覧じつけて、騒がしけれど、

かたみにぞかふべかりける逢ふことの日数へだてん中の衣
を(光源氏)

とて、「心ざしあるを」とて、奉りかふ。御身に馴れたるども
を遣はず。げにいまひとへ忍ばれたまふべきことを添ふる形見
なめり。えならぬ御衣の匂ひの移りたるを、いかが人の心にも
しめざらむ。
(②明石・二六八～九頁)

この明石の君の歌「寄る波に」に関して、鈴木日出男氏は、
明石の君の方から贈歌を詠みかけたのは、源氏の「今日奉る
べく狩の御装束」を贈るのに歌を添えるという作法に従ったか
らである。——中略——源氏のために用意した旅衣が、海人の衣が
潮じみているように私の涙で濡れているのを、あなたは厭わし
く思うだろうか、というのである。もともと予祝すべき出発の
日なのに、の気持をこめながら、別れの悲しみに堪えがたい自
分を顧みる歌になっている。²¹⁾
と指摘されている。

鈴木氏が指摘されるように、旅立つ人物に対して装束を贈り、そ

こに歌を添える慣習は存在している。その際に贈られる歌に、明石
巻と同じく「衣」が詠みこまれている事例を、『後撰和歌集』「拾遺
和歌集」からあげると次のようになる。

旅にまかりける人に装束つかはずとて、添へてつかはしけ
る
よみ人しらす

袖濡れて別はずとも唐衣ゆくとな言ひそ来たりとを見む

返し
よみ人しらす

別地は心もゆかず唐衣きれば涙ぞ先にたちける

〔後撰和歌集〕離別・二二三八、九)

天曆御時、御乳母肥後が出羽の国に下り侍りけるに、餞賜
ひけるに、藤壺より装束賜ひけるに添へられたりける

よみ人知らず

行く人をとゞめがたみの唐衣たつより袖の露けかるらん

〔拾遺和歌集〕別・三三二二)

源弘景ものへまかりけるに、装束賜ふとて

三条大皇太后宮

旅人の露払ふべき唐衣まだきも袖の濡れにける哉

〔拾遺和歌集〕別・三三二六)

これらの事例からわかるように、旅立つ人に贈る衣が、贈る人の
涙で濡れているという表現は、離別歌において典型的に詠まれてお

り、明石の君の歌「寄る波に」も、この類型の中で詠まれているといえる。

その上で、「海人」「潮どけし」といった明石の地を連想させる語を用いることで、都へと帰る光源氏に対する離別の歌としていのである。

六

ここまで、光源氏に関わる明石の君の贈歌を考察してきた。明石の君の贈歌は、決して異例のものではなく、その場面における明石の君と光源氏の関係や状況といったものを踏まえた上で詠まれている。

明石の君の贈歌が、その場面における人間関係や状況といったものを折り込みながら、自らの心情を詠んだものになっていることは、次の贈答からもうかがえる。

雪、霰がちに、心細さまさりて、あやしくさまさまにも所思
ふべかりける身かな、とうち嘆きて、常よりもこの君を撫でつ
くろひつつ見あたり。雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く
末のこと残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出でるなど
もせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよやかなるあ
また着て、ながめたる様体、頭つき、後手など、限りなき人

と聞こゆともかうこそはおはすらめと人々も見る。落つる涙をかき払ひて、(明石の君)「かやうならむ日、ましていかにおほかかなからむ」とらうたげにうち嘆きて、

雪ふかみみ山の道は晴れずともなほふみかよへあと絶えずして(明石の君)

とのたまへば、乳母うち泣きて、

雪間なき吉野の山をたづねても心のかよふあと絶えめやは

(明石の姫君の乳母)

と言ひ慰む。

(②薄雲・四三三頁)

この場面は、明石の姫君が二条院へ引き取られるのに従って、大井の地から二条院へと去ることになった明石の姫君の乳母と歌の贈答を交わす場面である。この明石の君の歌「雪ふかみ」に関して、鈴木日出男氏は、

女主人からさきに乳母へ歌を詠みかけて異例なほど積極的だが、それだけに姫君の安穩を願う気持が切実である。——中略——
明石の君が他者と和歌を詠み交すことは、ここでも、自らの心の真相を証するとともに、物語の新たな人間関係をつくり出すかけがえのない具となっている。²²⁾

と、「女主人からさきに乳母へ歌を詠みかけて異例なほど積極的」²³⁾であるとされている。

この場面は、明石の君と明石の姫君の乳母がお互いの別れを悲しんでいる場面の直後に配されており、直後にくるこの場面は、明石の君と乳母との離別の場面でもある。さらに、明石の君の歌の直前には、「かやうならむ日、ましていかにおぼつかならむ」と、姫君とその乳母と別れることに対する明石の君の不安な心情が語られている。

離別歌において、歌を贈るのは出立を見送る側であり、ここで明石の君が乳母に歌いかけるのは、そのことを踏まえているとしたならば、積極的な贈歌であるとは一概に言いきれないだろう。

また、離別歌は、

東の方へまかりける人に、よみて遣はしける

伊香子淳行

おもへども身をし分けねば目に見えぬ心をきみにたくへてぞや
る
〔古今和歌集〕離別歌・三七三

逢坂にて、人を別れける時に、よめる

難波万雄

相坂の関し正しき物ならば飽かずわかる、きみをとゞめよ

〔古今和歌集〕離別歌・三七四

というように、別れを悲しみ、相手をとどめたい、相手についていきたいといった心情を詠むという形をとるものでなければならぬ。明石の君は、姫君のための思い、手放すことを決めたのであり、そ

れは単純な見送る側と見送られる側という関係だけではない。だからこそ、「たえず文を送ってほしい」と詠むのである。

まとめにかえて

本稿では、女からの贈歌という視点から明石の君と光源氏の間で交わされる贈答について考察をすすめた。

明石の君の贈歌は決して異例のものではなく、むしろ、歌の詠まれる場に即した、歌の贈答の類型に添って詠まれているのである。

その中で、明石の君は、その場面の自らと光源氏との関係や折節に添った歌を詠みながら、自らの心情を相手に訴えかけるように光源氏に対して歌を詠んでいる。つまり、明石の君は、折節にうまく沿いながら、光源氏との関係において歌を詠みかけているのである。もちろん、これは平安時代の人々が歌を詠む際に当然考慮に入れているものである。そしてそれは物語歌にも折節が意識されていることは自明であろう。稿者は『源氏物語』における歌と折節の関係を考察することで、物語と歌、歌と人物の関わりを微細ながらも明らかにすることができないのではないかと考えている。本稿はその一端として、「女からの贈歌」という視点から考察をすすめたものである。

注

- ① 藤井貞和「うたの挫折——明石の君試論——」『源氏物語及び以後の物語 研究と資料』武蔵野書院、一九七九年。
- ② 鈴木日出男『源氏物語虚構論』東京大学出版会、二〇〇三年。五一—六頁。
- ③ 明石の君の歌は、主に光源氏との関わりの中で詠み交わされるものと、明石一族との間で詠まれるものに大別できるといことが指摘され、明石一族の中の明石の君の歌について研究されているものに、竹内正彦「よびおこされる明石入道——「若菜上」巻における明石の女たちの唱和——」『源氏物語発生史論——明石一族物語の地平線——』新典社研究叢書118、二〇〇七年、秋澤互「明石一族の和歌」(『源氏物語の歌と人物』翰林書房、二〇〇九年)、亀田夕佳「明石一族の〈ことば〉——若菜上巻の唱和歌をめぐって——」(『日本文学』第五九号、二〇〇一年四月)などがある。
- ④ 小町谷照彦『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会、一九九四年、一四〇頁。
- ⑤ ④同、五一—六頁。
- ⑥ ②に同、五一—六頁。
- ⑦ 高野晴代「花散里・明石の君／六条院に迎えられた妻妾——久保朝孝編『女たちの光源氏』進典社、二〇一四年、第四章。
- ⑧ 本稿で使用した『源氏物語』『蜻蛉日記』『伊勢物語』『大和物語』『和泉式部日記』の本文は『新編日本古典文学全集』に拠り、引用の際は文末に巻数・巻名・頁数を示した。また、『源氏物語』本文における()内の人物名は発話者あるいは歌の詠者を示す。『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』の本文はいずれも『新日本古典文学大系』を用い、『古今和歌六帖』の本文は『新編国歌大観 第三版 CD-ROM版』に拠

『源氏物語』女からの贈歌考

った。なお、引用論文や『源氏物語』本文の——は私的に附したものである。

- ⑨ 例えば、『後撰和歌集』(恋三・七〇七、七〇八番歌)、『伊勢物語』七五段、『大和物語』六七段、『蜻蛉日記』(上、一一二頁、『和泉式部日記』三八頁など。
- ⑩ 『細流抄』(『内閣文庫本細流抄 源氏物語古注集成第七卷』桜楓社、一九八〇年)。なお、引用中の句読点は私に附した。
- ⑪ 鈴木日出男「明石の君の歌」『成蹊国文』第四三号、二〇一〇年三月、⑪に同じ。
- ⑫ ②薄雲・四六五頁。
- ⑬ ②薄雲・四六六頁。
- ⑭ ③薄雲・四三四頁。頭注二。
- ⑮ ④同、一六三頁。
- ⑯ ③初音・一五〇頁。頭注四。
- ⑰ 田中幹子「『源氏物語』初音の巻の明石の君について——「谷のふる果をとへる鶯」歌の解釈を中心に——」『和歌文学研究』第七〇号、一九九七年六月。
- ⑱ ⑦に同じ。
- ⑳ 吉海直人「源氏物語の新考察——人物と表現の虚実——」おふう、二〇〇三年。一六五—六頁。
- ㉑ 鈴木日出男「明石の君の歌」『成蹊国文』第四三号、二〇一〇年三月。
- ㉒ ②同、五二七—八頁。
- ㉓ ㉒に同じ。
- ㉔ ②薄雲・四三一頁。